特集：抗菌剤の適正な使用法*

A Symosium : The Reasonable Application of Antimicrobials for Animals

今回のシンポジウムにあたって

高　橋　　勇（日本獣医畜産大学名誉教授
・動物用抗菌剤研究会理事長）

当研究会のシンポジウムは今回で第25回を迎えた。

今回のテーマは「抗菌剤の適正な使用法」であるが，これに関連する前置きとして，この機会に今日までの本会が辿った道程について述べておきたい。

いうまでもなく，動物の細菌感染症に対する抗菌剤の応用は，医学の場合と異り，さまざまな制約条件により，使用可能な抗菌剤の種類がかなり限定されており，また個体治療のみでなく，集団治療が要求される場合も少なくない。したがって，実際面では，対象となる感染症に対し，限られた薬剤の中でどれを，どのように使用したら十分な治療効果をあげられるか，という点が大きな課題である。具体的にいえば，それぞれの感染症の治療に際して，使用が承認されている抗菌剤のどれを選択したらよいのか，またその効果を最大限に発揮させ，しかも残留を防止するためには，どのような投与方法が適当なのか，その際に耐性菌の出現を極力防止し，薬剤の有効性を将来ともに保持させるためには，いかなる配慮が必要であるか，さらに産業動物の場合には，経済面も考慮しなければならない，など多くの問題点がある。

以上の観点から，本会は1973年の発足(その時の会名は家畜の耐性菌研究会。1992年に現在の会名に改称）以来，事業目的の一つとして「薬剤使用の適正化」を掲げてきた。このため，本会のシンポジウムおよび同時に開催した特別講演のテーマとして，動物由来菌の薬剤感受性および耐性の問題とともに，しばしば抗菌剤の臨床応用に関連する基礎的な事項や薬剤残留の問題を取り上げてきた。また，最近では臨床現場における細菌感染症の治療に関する問題を，第21回（1994年）及び第23回（1996年）のシンポジウムで取り上げ，臨床家の参考に供してきた。

今回のシンポジウムでは，さらに一歩進めて，家畜の細菌感染症の治療対策に関し，抗菌剤の投与とともに治療効果をさらに促進する薬剤を併用した場合の効果について，牛の乳房炎と搾乳牛のサルモネラ症の治療の成績を，第一線で活躍中の中川，小茂田両氏に，それぞれご講演をお願いした。これとあわせて，現在の畜・水産領域で大きな課題である水産界における細

* 本特集は1998年4月25日に開催された第25回本会シンポジウムの講演要旨である。

菌感染症と抗菌剤の使用実態についての講演を，魚病の専門家の新川氏に，また鶏のコクシジウムの薬剤耐性の感受性への復帰の問題について，コクシジウムの専門家である斎藤氏に，それぞれご講演をお願いした。今回のシンポジウムが広く野外で活躍中の臨床家の方々にご参考になれば幸いである。なお，今後このような企画に対するご要望やご提案があれば，会員に限らず，ぜひ本会にお申出いただきたい。

各演者の方々には，ご多忙中のところを，ご講演と要旨のご寄稿を快諾していただいたことに対し，本会を代表して厚く御礼申し上げます。